

神奈川県立博物館発掘調査報告書

第 5 号

左 藤 内 遺 跡

A REPORT ON THE ARCHAEOLOGICAL EXCAVATIONS
BY KANAGAWA PREFECTURAL MUSEUM

No. 5

SATONAI

神 奈 川 県 立 博 物 館
KANAGAWA PREFECTURAL MUSEUM
Naka-ku Yokohama, Japan
1971

序

当館では、博物館における地域研究ならびに資料収集の一環として、遺跡の発掘調査を行なっております。

左巻内遺跡の調査もその一部で、昭和44年12月に実施いたしましたが、このほど調査結果の整理、検討が一応終わりましたので、ここに報告書を刊行いたします。

刊行にあたり、調査ならびに資料整理に格別のご協力を賜わった株式会社新井清太郎商店社長 新井清太郎氏、黒川悦郎氏、横浜市三駿台考古館 井上義弘氏、大学ならびに高校生の方々に厚くお礼申し上げます。

昭和46年3月

神奈川県立博物館

館長 斎藤太次郎

目 次

1 左藤内遺跡の調査について	1
2 遺跡の位置	1
3 調査の概要	2
1号住居址	6
6号住居址	8
7号住居址	10
遺 物	13
4 結 び	14

挿図・図版目次

第1図 左藤内遺跡付近地形図	2
第2図 調査区平面図	4
第3図 発掘区平面図	4
第4図 1号住居址実測図	7
第5図 6号住居址実測図	9
第6図 7号住居址実測図	10
第7図 石器・土器実測図	11
第8図 出出土器（折本）	12

図版1 1. 遺跡全景 2. 1号住居址

図版2 1. 6号住居址 2. 6号住居址炉址

図版3 1. 四面（6号住居址出土） 2. 石器（各地点出土）

図版4 1. 6号住居址出土土器 2. 2号住居址埋甕

調査主催者………神奈川県立博物館館長 斎藤太次郎

発掘担当者・報告書執筆………神奈川県立博物館主任学芸員 神沢勇

1 左藤内遺跡の調査について

昭和43年、梶山遺跡の第3次調査を行なったさい、加曾利E II期に属する11号住居址に、大木8b式土器の系統をひく鉢形土器を用いた埋甕が存在した。埋甕そのものは同期の住居址では例が多いが、他地方の系統をひく土器を使用した例がしばしばあるところから、埋甕の性格とともに、この種の土器のあり方について、少なからず关心をもった。

たまたま、同遺跡の資料を整理中、黒川悦郎氏から横浜市磯子区森町で埋甕と思われる土器が出土したという報告を受け、現地を調査した結果、加曾利E II式の鉢形土器（P.11第7図8、図版4-2）が埋甕と推定できる状態で出土したことが知られ、地点もほぼ確認できた。そこで発掘調査を実施する計画をたて、昭和44年11月7日から11日まで測量を兼ねた予備調査を、次いで同月30日から12月11日まで本調査を行なった。調査結果の整理に日数を要したためかなり遅れたが、このほど資料整理が一応終わったので、概要を報告して貰いたい。

2 遺跡の位置・環境

左藤内遺跡は横浜市磯子区森町字左藤内1289番地および1992番地にあり、京浜急行電鉄屏風ヶ浦駅の西南西約300mの距離にある標高約60mの台地上に位置する（P.2第1図）。

この台地は東京湾沿いにつらなる低平な丘陵の一部で、付近一帯は東西から小さな谷がいくつも入りこみ、やや複雑な地形を示している。周囲の景観は、最近における急速な宅地化と開発工事のため著しい変化をとげており、旧地形図によれば、遺跡を載せた台地も以前は南側の台地とつながっていたことが知られ、また、東京湾汀線までは直線距離約800mである。

遺跡は台地上面から西南側の緩斜面に及び、現在大部分が畠地で、東西約60m、南北約80mの範囲に遺物の散布が認められる。その中央を、ほぼ南北に伸びる小道が横切り、この道の西側は1.5m前後の深さまで削平され、道との間に低い崖状の斜面がある（図版1-1）。埋甕が出土したのは、削平部分南半の崖にちかい地点である。

台地の西側縁辺と南側は切削され、現状では約5mの崖で終わっている。西側断面には3基の横穴墳墓の玄室が一部分残っている。かつて道路工事が行なわれたさいに発見され、壇（須恵器？）その他二三の遺物が出土したと伝えられるが、詳細は明らかでない。残存部分の形状から判断すれば末期の横穴墳墓と思われる。また、本遺跡の南西にある県立磯子工業高等学校敷地付近には、以前この台地に続く丘があつて、勝坂式土器を出土する遺跡が存在していた。

3 調査の概要

前に述べたように、左藤内遺跡が存在する台地の西半分は、既に削平され原状を失なっているが、削平部東端の崖面の状態から、表土——腐植土——（平均30~40cm）、暗褐色土層（50~60cm）、褐色土層（30~40cm）、関東ローム層の順で堆積していたことが知られる。ボーリング調査の結果では、現地表下20~30cmで関東ローム層に達する個所も認められたが、埋甕の出土地点付近には暗褐色土層が比較的厚く残存し、また遺物の散布が最も多かった。

以上の所見により、調査は埋甕の出土地点を中心に、台地南半部に対して重点的に行なうこととし、東西32m、南北40mの範囲に調査区を設けた。調査区は4m×4mの単位でA1からH10までのグリッド（以下グリッドを略）に区画し（P. 4 第2図）、第2図に斜線で示した部分を発掘した。発掘面積は延140m²である。

発掘区域内では、第3図に示したように9個の竪穴住居址（No. 1~9）が存在したが、重複



第1図 左藤内遺跡付近地形図 (1:20000)

と擾乱があり、遺存状態が予想以上に悪く、ほとんど全形を明らかにできなかった。

住居址の時期別個数は、縄文時代6……加曾利E II期=4 (No. 2・3・4・6・8), 中期〔型式不明〕=2 (No. 5・9), 弥生時代1……弥生町期 (No. 1), 古墳時代1……五箇期? (No. 7) である。

また、調査区西半部は表面に遺物の散布が少なくないが、斜面の傾斜がつよく、一応全域にボーリング調査を行なったが、遺構の存在する形跡は認められなかつたので、発掘を見合わせることにした。

発掘区域内の現状における層序は、地点により幾分異なるが、暗褐色土層（下部）20~40cm, 褐色土層 30~40cm, 関東ローム層となっている。F 5・6, G 5・6・7以外では暗褐色土層はかなり薄く、F 7・8の一部とG 8では褐色土層が表面に現われており、従って、ここで耕作土と呼ぶものは、各地点の残存土層のうち耕作により擾乱された部分を指す。

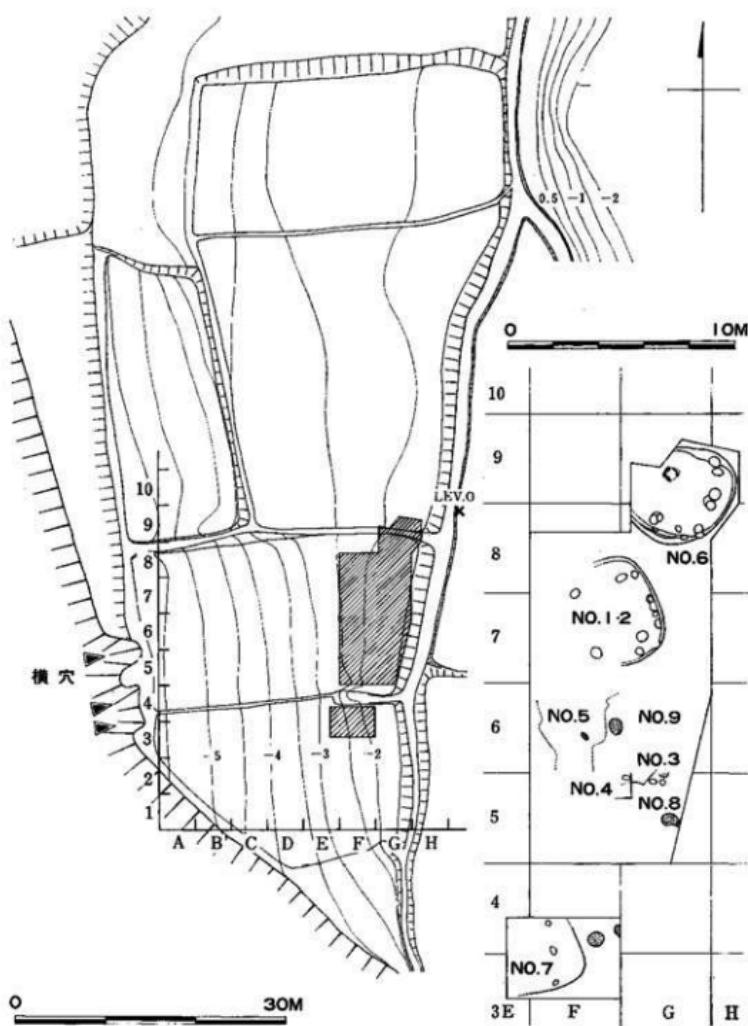
遺物は耕作土、暗褐色土層、褐色土層上部および住居址覆土から出土したが、住居址覆土以外では、一般に散漫であった。

なお、畑はニリその他の球根類栽培に使用されているので、耕作による擾乱は少なく、むしろ道に近い関係で、各所に設けられた貯蔵穴のため、部分的に著しく擾乱されている。

次に調査の結果と各遺構の概要を経過にしたがって述べることにしたい。主要な住居址と出土遺物については、あとで別に説明を加えることにする。

調査は埋甕の出土から住居址の存在が予想されるE 7・8の発掘から開始した。その結果、表土下約20cmの深さに、褐色土層中に多量の有機物を含む黒色土の落込みがあり、西および北側へ弧状にひろがっていたため、発掘範囲をF 8・9およびG 9の一部まで拡張した。黒色土は拡張部西側にはほとんど残っていないが、直下に竪穴住居址床面があり、黒色土は約10cmの厚さで住居址を覆っていることが確認された。これを1号住居址とした。床面および黒色土中から弥生町式土器が出土した。床は張床で、約半分を失っているが、柱穴の配置からみて、扁円形のプランをもつ弥生町期の住居址である (P. 7 第4図, 図版1-2)。

1号住居址の床面下約10cmには、関東ローム層中に掘込んだ別個の竪穴住居址が存在した。これを2号住居址としたが、破壊が著しく、床面は断続的に遺存するにすぎず、プランおよび柱穴の配置は明瞭でない。床面に密着して加曾利E II式土器の破片と打製石斧1 (図版3-2d) が出土しており、加曾利E II期の住居址と認められる。さきに出土した埋甕は、F 8 (P. 7 第4図 平面実測図参照) に明瞭な埋設の痕跡が発見され、復原状態において2号住居址とレベルの差がほとんどないので、この住居址に伴うものと見做して誤りないのであろう。



第2図 調査区平面図

第3図 発掘区平面図

住居址覆土からは、加曾利E II式、加曾利E III式、称名寺式、壺の内I式土器等の破片が出
土し、特に称名寺式土器が多いが、床面の形跡はなく、単なる混入と認められる（P.12第8
図）。2号住居址は大部分が1号住居址と重複する模様であり、1号住居址の建設によって破壊
されたと推定できる。

1号住居址、2号住居址の調査と並行して、落込が存在するG 5・6、F 5・6の発掘を行
なった。この部分には暗褐色土層がかなり厚く残り、3号住居址、4号住居址、5号住居址、
8号住居址、9号住居址が存在したが、重複が著しく、また、8号住居址をのぞけば、9号
住居址は床面が褐色土層中にあり、そのほかはいずれも一部が軟弱な張床である。加えて貯蔵
穴により破壊されているため、規模、プランともに不明で、存在を確認し得たにすぎなかった。

これらのなかで、3号住居址、4号住居址、8号住居址は加曾利E II期の住居址である。

8号住居址は関東ローム層を55cm掘込んで床面を設けている。G 7からG 8にかけて煉瓦大
の自然石で囲んだ炉が存在した。擾乱による破壊をうけており、規模は約70cm×70cmと推定さ
れる。焼土は厚さ8cmである。また、G 7南端に薄い焼土が認められた。遺物は床面から加曾
利E II式土器の出土があるにすぎない。4号住居址は関東ローム層上面から30cmの深さに床面
があり、8号住居址と重複する部分は関東ローム土を固めた張床となっている。床面直上に加
曾利E II式土器破片が出土したほかは遺物の出土はない。4号住居址は、8号住居址と上を覆
う3号住居址との関係から、時期を同じくすることが知られる。3号住居址も一部を関東ロー
ム土で固めた張床の住居址で、関東ローム層上面から約10cm下に床面を設けている。床面上に
加曾利E II式土器の破片数個と薄い焼土が存在した。各住居址覆土中には遺物の包含がやや多
いが直接関係するものはほとんどなく、茅山上層式、諸磯b式土器の破片が目立った点をのぞ
けば、特別な傾向は認められない。

5号住居址、9号住居址もF 6、G 6の4m×5mの範囲に床面が一部残存するだけで、規
模、プランとも不明である。前後関係は9号住居址が古い。いずれも褐色土層中に床面を設け
た住居址で、床面がひじょうに軟弱である。9号住居址には平面90cm×80cm、焼土の厚さ25cm
をはかる大型の炉が、焼土中から、加曾利E I式または勝坂式と思われる土器破片が出
土した。型式を判定しがたいが、縄文時代中期に属する住居址であることは確実といえる。5
号住居址は9号住居址と僅かな差をもって重複しており、床面の一部、50cm×40cmの範囲に薄
い焼土が存在した。時期は不明である。5号住居址覆土および暗褐色土層にかけて、勝坂式、
加曾利E I式、加曾利E II式土器の破片が多量に出土し、他時期のものを混じえない点で縄文
時代中期のものとみてよいであろう。

次いで発掘を試みた調査区南寄りのE 3・4, F 3・4には、関東ローム層上部（軟質部）に堅穴住居址の壁と床面の一部が残存していたので、7号住居址とした（P. 10第6図）。この地点では表面が暗褐色土層下部から始まるため、土の堆積が薄く、覆土も著しい擾乱を受けているが、床面に接して五領式土器に属する高杯形土器の破損品1（P. 11第7図7）が存在した。7号住居址に伴う土器と考えられる。

7号住居址北側には、関東ローム層上面（軟質部）に焼土が2個所存在したが、周間に床面と認め得るような形跡はない。

以上の各地点のほか、1号住居址発掘中、G 8北側において関東ローム層上部から始まる暗褐色土の落込が認められた。ちょうど烟の出入口と高圧線の電柱を支える鋼線の埋設点にかかるため、落込の範囲を確かめながら発掘区を拡張した結果、G 8・9, H 8・9にまたがって堅穴住居址1個が存在した。ほぼ全形を伺い得る加曾利E II期の住居址で、改築の形跡を明瞭に残し、床面北寄りに、石で囲った炉址がある（P. 9第5図、図版2-1・2）。新・旧床面と炉址焼土中から土器破片（P. 12第8図27・28・29、図版4-1a・1b・1d等）10数片が、西側床面直上で鉢形土器下半部（P. 11第7図6）が出土し、別に、砂岩製の凹石1（P. 11第7図1、図版3-1）が炉の囲いに使用された状態で残っていた。

なお、6号住居址北西壁、床面上15cmの位置には、別の住居址の断面がみられ、炉の一部が露出している。床面上から加曾利E II式土器の破片が出土しているので同時期の住居址と考えられるが、6号住居址覆土中には張床の形跡はなく、したがって6号住居址に先行することが知られる。この住居址は、大部分がさきの鋼線埋設箇所にかかるため良好な遺存状態は望めず、技術的にも発掘不可能であるので調査を見合わせた。

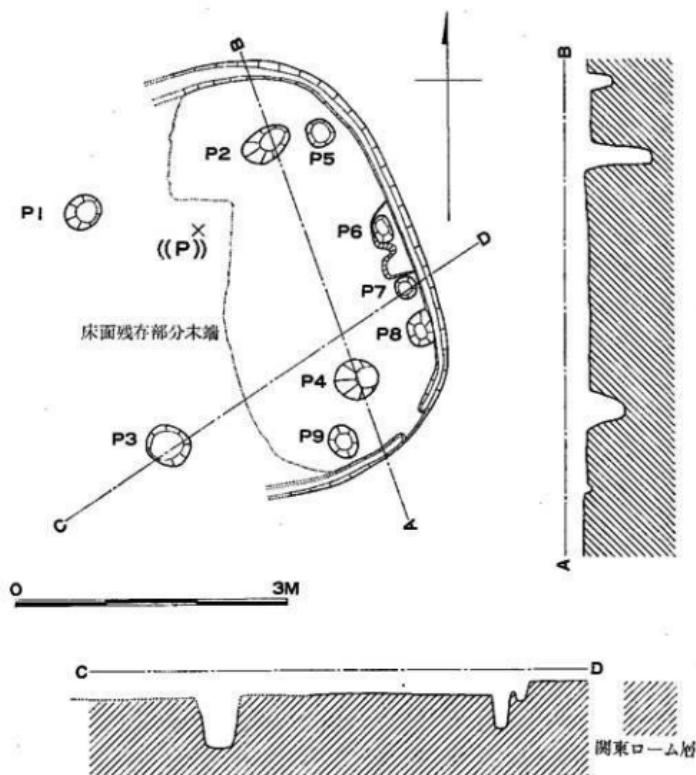
次に、住居址と出土遺物のうち、おもな例について、多少説明を加えておきたい。

1号住居址（P. 7第4図、図版1-2）

弥生町期の堅穴住居址で、西側床面と壁を含む約2分の1を失なっている。東半部では東西約2.5m、南北4.8mの範囲に壁と床面が残存するが、壁の上端は破壊されており、現状では高さがかなり低い。西側では床面を失ない、大型の柱穴2個（P 1, P 2）を残すだけである。

この住居址が存在する部分は、斜面の傾斜が増し始めるところにあたり、土層の堆積も薄くしたがって、破壊は削平または耕作に原因すると考えられる。

現存部分の状態からみて、1号住居址の主柱穴はP 1～P 4、プランは主軸が東南——西北方向をとる扁円形で、規模は5m×4.5m前後と推定される。



第4図 1号住居址実測図 (LEVEL = -200CM)

単位=cm

P1 ~ P9 = 柱穴
((P)) = 2号住居址埋葬

柱穴計測値

柱穴番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9
長径	56	50	42	58	30	30	25	38	38
短径	48	38	36	35	29	19	23	28	32
深さ (LEV)	47 (285)	44 (266)	41 (279)	43 (273)	15 (245)	20 (254)	41 (265)	28 (252)	26 (250)

床面は現地表（削平後の畠面）下、約25cmにあって、P4が存在する部分を除き、関東ロームを5~8cmの厚さで敷き固めた張床となっている。現状における壁の高さは10~15cm前後で、裾に周溝がめぐる。幅15~20cm、深さ10~15cmで、東南隅では幅と深さが減り、約40cmほど途切れた部分がみられるが、一般に出入り口が設けられる位置であるので、それと関係するものであろう。

周溝の内側に沿って存在する5個の柱穴は、壁面の崩れを防ぐための施設に伴うものとも考えられるが、深さが一定しない点で疑問がある。

1号住居址の残存部には、既に述べたように、多量の有機物を含む黒色土が充満していたがこの黒色土は微小な炭化物を含有するとともに、きわ立った黒さを示す点で他の住居址の覆土とは全く異なる。また、床面に密接した状態からも後世の混入とは認め難い。號、床面に火災を証する形跡は認められないが、その可能性は多分にあると考えられる。

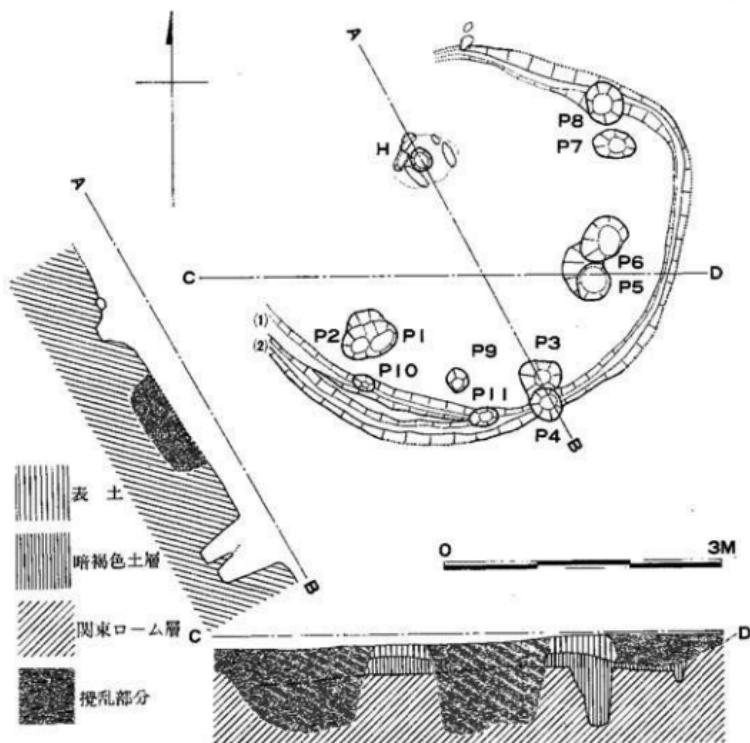
6号住居址 (P. 9第5図 図版2)

加曾利E II期の堅穴住居址で、搅乱により数箇所が破壊され、北側の壁は別の住居址を切っているため明瞭でないが、全形を察知し得る程度の状態で残っている。また、改築拡張が行なわれており、新、旧2期がある。

プランは不整円形で、遺存状態から、新住居址の規模は5m×4.7m、旧住居址は4.7m×4.3m前後であったと考えられる。床は関東ローム層を掘込んでいる。新、旧床面のレベルの差は2~3cmで、床面の凸凹もあり、平均ではほぼ同じと言ってよい。ただ、南隅にみられる拡張部の付近だけは、特に厚く床を張りなおしており、5~10cmの差がある。壁の高さは約30cmで、壁に沿って幅15~20cm、深さ20~30cmで周溝がめぐっている。

柱穴は現状で11個認められ、2個が並列した形で、ほぼ等間隔で存在する。配置、切合の関係から、新旧別は次頁の表に示したようになるが、P9(旧)、10・11(新)は補助的なものであろう。なお、10・11には出入り口部分の補強材の柱穴であった可能性が考えられる。

新住居址の炉は西北寄りにある。平面75cm×60cmで、北側に拳大および焼瓦の大自然石各2個と凹石1(P.11第7図1)を埋め、弧状に囲っている(図版2-2)。焼土は厚さ10cmで、南側に12cm×30cmに厚さ15cmの捨灰がある。なお、この新住居址の焼土の底に直径約20cm、深さ18cmの円筒状の穴があり、少量の焼土が認められた。旧住居址床面には他に炉の形跡がないので、同位置に存在した旧住居址の炉であろう。なお、炉穴が円筒状を呈する点については、埋廻炉であった疑いがある。

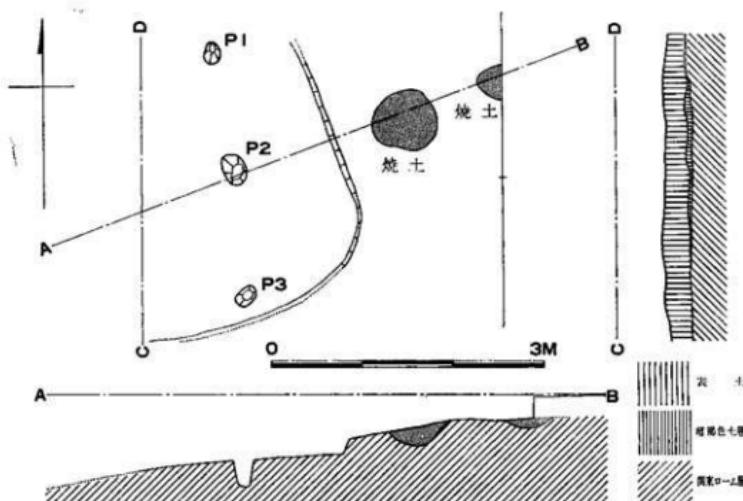


第5図 6号住居址実測図 (LEVEL=-200CM) P1~P11=柱穴
H=伊址

柱穴計測値

単位:cm

柱穴番号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P10	P11
長　径	37	36	44	38	44	55	46	47	27	25	31
短　径	32	29	29	32	35	46	30	39	25	17	20
深　さ (LEV)	75 (311)	59 (297)	56 (285)	50 (279)	77 (303)	58 (300)	58 (297)	74 (314)	41 (269)	21 (269)	38 (280)
新　旧	旧	新	旧	新	旧	新	旧	新	旧	新	新



第6図 7号住居址実測図 (LEVEL=-290CM)

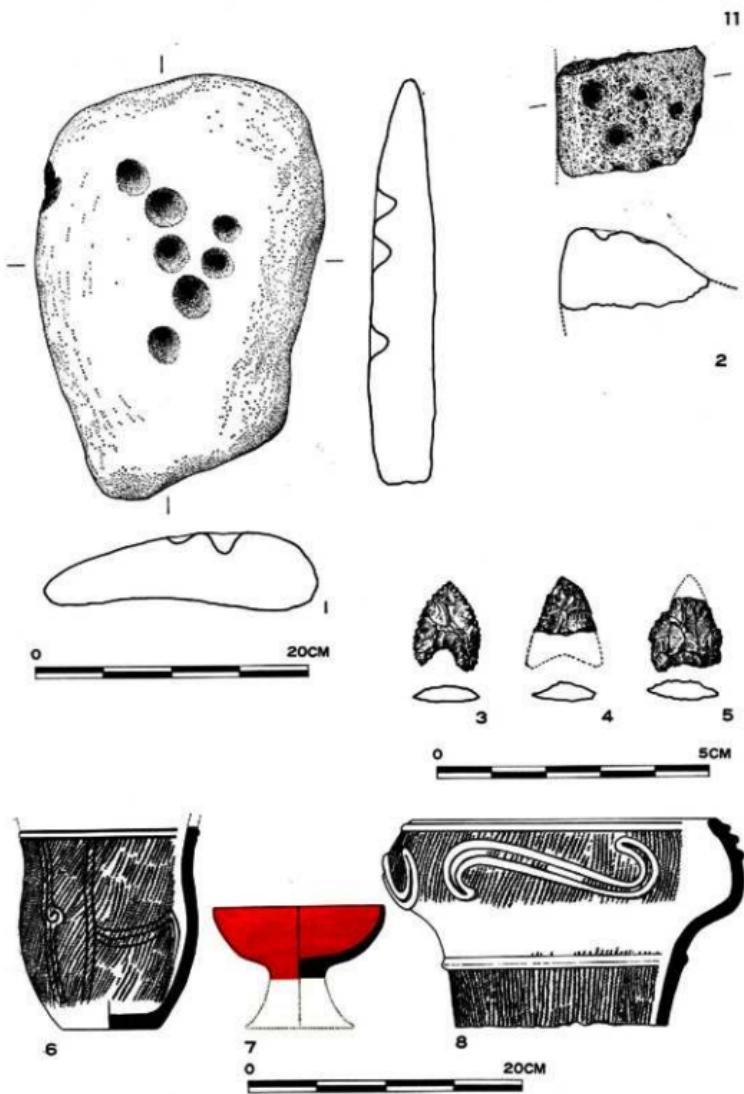
柱穴計測値 単位=cm

柱穴番号	P 1	P 2	P 3
長 床	25	35	25
短 径	17	24	17
深 さ (L E V)	11 (294)	30 (302)	8 (280)

7号住居址 (P.10第6図)

床面に密着して出土した高杯形土器の特徴から、五領期に属する住居址と考えられる。堅穴住居址そのものは良好なものではないが、類例が少ないので、取りあげておきたい。

7号住居址は東側の壁と床面の一部を含む東西約3m、南北3.5mの範囲が残存するにすぎない。残存部分は少ないが、南側壁の形状から小型の住居址で、プランは主軸がほぼ東西方向



第7図 石器・土器実測図
1・4・5・6 = 6号住居址, 7 = 7号住居址
8 = 2号住居址(埋甕) 2・3 = 暗褐色土層



第8圖 出土土器拓本
 (1) 1—7 〈表土=1·2, 蘭褐色土層=3·4〉 (2) 1號住居址〈床面=5·7, P 4內=14, 覆土=6·12·13·17·18〉 (3) 2號住居址〈覆土=15·19~23〉 (4) 6號住居址〈床面=28·29, P 1內=26, 炉穴內=27, 覆土=24·25·30·31〉

をとる胴張りの長方形を呈するらしい。床面は関東ローム層上端から約20cm下にあり、西へ約3°傾斜している。壁は僅かに傾斜をみせるが、周溝はない。東側の壁近くに3個の柱穴がある。西側の2個はきわめて浅いが、明らかに柱穴と認められる。なお、住居址の大体の規模と柱穴の配置を知るために、残存する床面以外の部分も一応調査したが、擾乱が激しく、柱穴は確認できなかった。

遺物

総量は約リンゴ箱3個分で、かなり少ない。これは遺物を包含する暗褐色土層と褐色土層上半部が失なわれていることや、擾乱による散逸に原因するものであろう。遺物はほとんど土器破片で、ほかは石器と土製品が少数あるにすぎない。

土器……茅山上層式、諸磯b式、勝坂式、加曾利E I式、加曾利E II式、加曾利E III式、細の内式、称名寺式、弥生町式、五領式の各型式の破片が認められるが、加曾利E II式土器に属するものがほとんどで、この型式には中部地方的な要素をもつ例がやや多い点が注意される。そのほかの型式については例数が少ないため、何とも言えないが、出土した例の範囲内では、特に目立った点はみられない。なお、特殊な例としては、さきに出土した2号住居址に伴うと考えられる埋甕がある。最大幅27cm、現状における高さ15.5cmで、右燃りの燃糸を地文とし、口縁部にS字状の陸線文4個が、胴部には上端の横線から直角に延びる2本1組の平行陸線文が4カ所にある。頭部は一部研磨されている。保存状態は良く、炉に使用した形跡はみられない。

石器……形状を伺うものは28個で、種別割合は石器3（P.11第7図3～5）、打製石斧17（図版3～2ほか）、砾器2、剥片石器1、磨石1、凹石2（第7図1・2、図版3～1）等がある。住居址床面に存在した例は少ないが、住居址床面以外から出土したものも砾器、剥片石器をのぞき、形状、出土位置等からみて、縄文時代中期——大部分は加曾利E II式——に属すると推定される。

石器について特に注意すべきことはないが、ただ6号住居址の炉に使用されていた凹石は砂岩で製作されている点でやや特殊な例と言えよう。片面は僅かにくぼめたような状態を示しており、石皿として使用されたことも考えられるが、砂岩製であるので、疑問である。

土製品は土錘1種類だけである。総数16個で、すべて土器破片の周囲を磨き、長軸の両端に糸掛けを行った普通のものであって、器面の文様から、加曾利E II式土器に属することが知られる。なお、短軸の両端にも糸掛けを行ったものが1例だけある。

4 結 び

調査結果の概要は以上に述べたとおりで、縄文時代中期の堅穴住居に伴う埋葬の性格を明らかにするための直接的な資料は十分得られず、所期の目的を達したとは言い難い。

しかし、最初発見された土器が2号住居址に伴うことを確認し、また、6号住居址を発掘した結果、住居の改築、拡張に関する資料を得ることができた。

出土遺物及び住居址については、まだ検討をする点がかなり残っており、本稿では詳細な説明を行なうことができなかったが、それらについては更に整理を行なったうえ、いずれ機会をみて補足を行なうことにする。

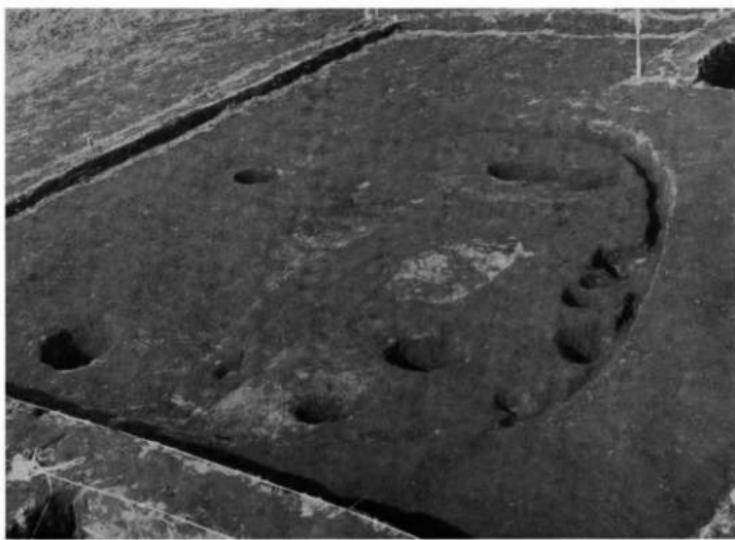
〔注〕

- (1) 神沢勇一「尾山遺跡(8)」神奈川県立博物館発掘調査報告書 第4号 神奈川県立博物館、1970年
- (2) 穂口清之・川崎義雄・小田静雄「神奈川県川崎市野川西耕地遺跡発掘報告」上代文化 第37輯
国学院大学考古学会、1967年

図版 1



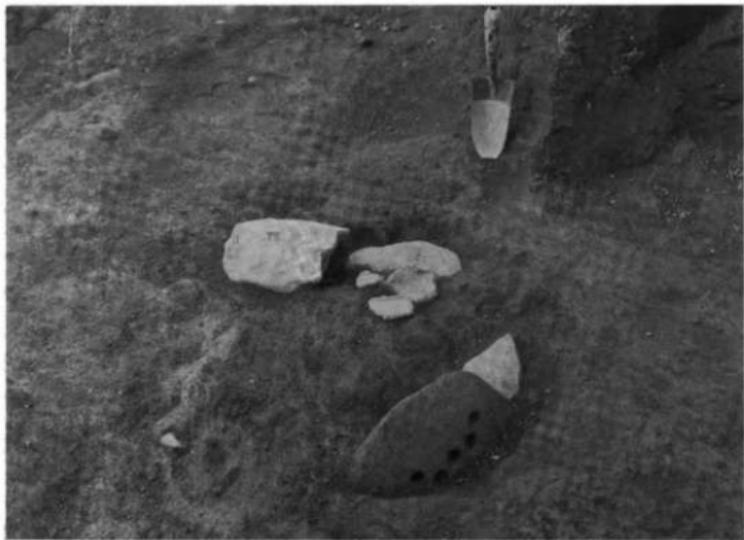
1. 遺跡全景



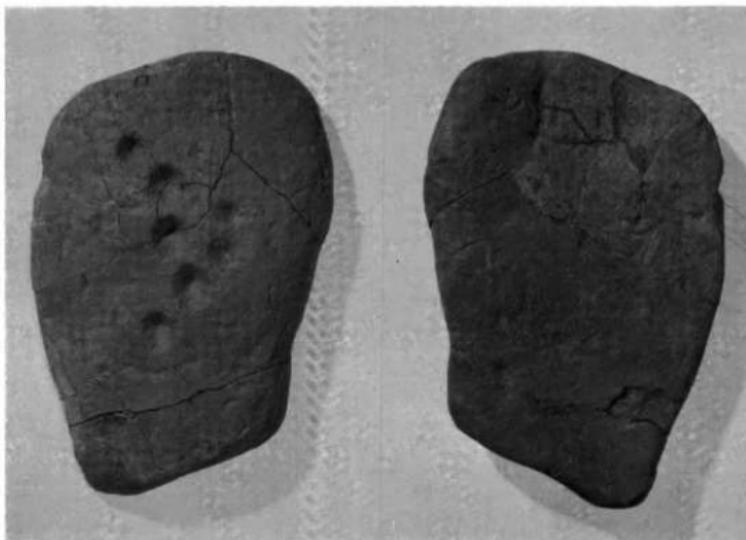
2. 1号住居址



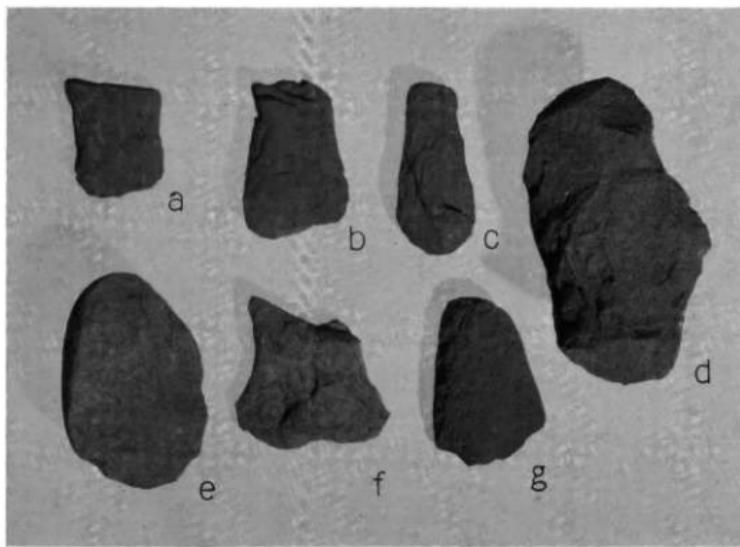
1. 6号住居址



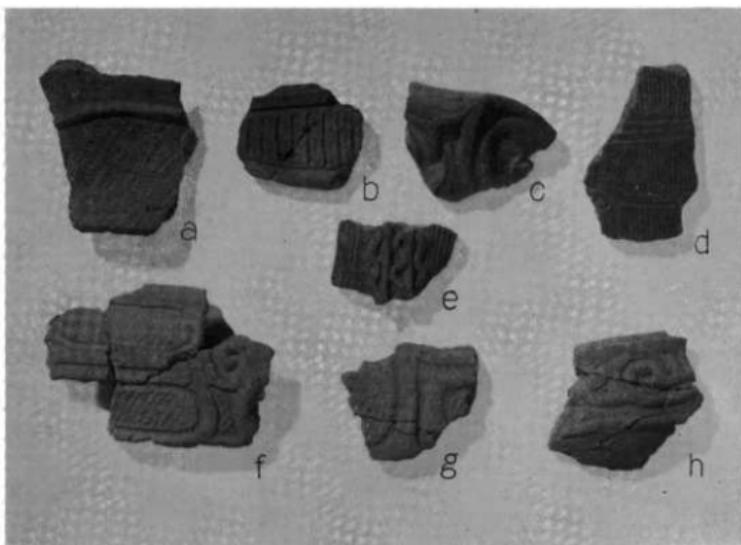
2. 6号住居址炉址



1. 凹 石 (6号住居址出土) 表面 裏面



2. 石 器 (各地點出土)



1. 6号住居址出土土器



2. 2号住居址埋甕

昭和 46 年 3 月 20 日 印刷
昭和 46 年 3 月 31 日 発行

編集者兼発行者

神奈川県立博物館
齊藤 太次郎
神奈川県横浜市中区南仲通5-60

印刷所 株式会社 平井印刷所